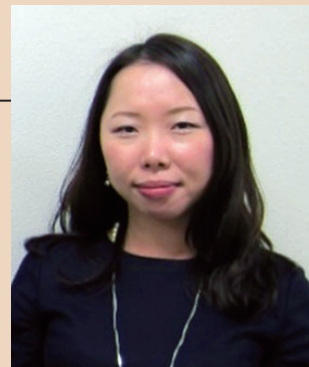




近藤 美欧 大阪大学大学院工学研究科応用化学専攻 准教授
(前 生命・錯体分子科学研究領域 助教)

人とのつながりに支えられた分子研生活

こんどう・みおう / 2003年東京大学理学部化学科卒業、2008年東京大学大学院理学系研究科化学攻博士課程修了、博士(理学)。2008年日本学術振興会 特別研究員PD(京都大学物質-細胞統合システム拠点(iCeMS))、2011年JST ERATO 北川統合細孔プロジェクト博士研究員、2011年8月分子科学研究所生命・錯体分子科学研究領域助教、2019年6月より現職。



私が分子研を初めて訪問したのは、田中晃二先生が主催された第5回日中クラスター会議に参加した修士2年のときでした。国際会議に出席することも国立研究所を訪問することも初めての経験でしたので色々なことが新鮮でした。特に、広大なスペースで研究員の方々が精力的に実験されているのを目にし、少数精鋭で最先端の研究を行っている研究機関との印象を受け、いわゆる大学の研究室とはずいぶん違うところなのだかと驚きました。その後、京都大学で博士研究員として勤務していた2011年の初めに正岡先生が分子研で研究室を新たに立ち上げ、助教を公募する予定があることを知りました。とても興味があったとの同時に、これまでとは異なる分野・環境・立場で自分に何ができるのか?と不安に思い、正直迷いました。ですが最終的には、経験したことのない状況に身を置けば想像できない楽しいことがあるはずだと期待する気持ちが勝り応募を決め、運よく採用していただきました。

分子研での生活は、常に学びの日々でした。触媒化学という異分野への挑戦はもとより、如何に研究グループの皆さんと楽しんで研生活を送るか、

新たな研究を立ち上げるための心構え、自分が研究者として誇れることは一体何であるのか、といった多くの問いに直面し、それに対する解を求め続けたように思います。このような毎日をごす中で、非常に力になったのは、ひとえに周りの皆さんとの関わりでした。分子研は大学と比較して人数が少ない分、他研究グループの先生方ともセミナー・共同研究・飲み会といった色々な場面において親しくお話をさせていただく機会が多く、たくさんの刺激を受けました。そして、正岡先生や研究グループの学生さんとはじっくり時間をかけて本音で語り合い、非常に濃密な時間を過ごすことができました。これらの経験を通じて、少しずつ研究者としての自分というものが形作られていったように感じています。また、研究グループに在籍した個性豊かな学生さん達と、一緒に研究を作り上げる喜びを共有できたことも研生活を送るうえで大きな励みとなりました。分子科学研究所での生活は私にとってかけがえがなく、今後の人生の支えになっていくものと思っています。

最後になりましたが、2011年8月から2019年6月までの約8年間の在

任中、大峯・川合両所長、正岡先生をはじめとする数多くの先生方、職員の皆様に多くのご支援をいただきました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。分子研で培った経験を礎にこれからも研究・教育活動に邁進する所存です。今後とも何卒よろしくお願い申し上げます。